

百年戦争とフランス民族の形成（上）

——ノルマンディにおける支配と抵抗をめぐって——

川 口 博

【要約】 一般に百年戦争の時代はフランス民族の形成期と考えられ、ことにその末期イギリス占領地域に展開された民衆の抵抗運動は「民族的抵抗」として把えられている。ここではとくにノルマンディにおける民衆の抵抗の種々相をできるだけ具体的にとりあげて、それが文字通り「民族的」であつたか否かをイギリスの占領政策の実状から考察し、さらにそれがこの時代のフランス民族ないし民族意識のあり方（その成熟度、その王権との関係）とどのように関係するのかという問題を究明しようとした。

目 次

- 一、いわゆる「民族的抵抗」
- 二、ノルマンディの抵抗運動（以上本号）
- 三、イギリスのノルマンディ支配（以下次号）
- 四、抵抗運動と民族の形成

一、いわゆる「民族的抵抗」

一般に百年戦争はフランス民族意識の成長を刺戟し、その開花を促進したといわれる。^①「この戦争は王朝的かつ封

建的紛争として発生したけれども、なかんずく外国軍隊の占領という事態から、ますます民族的な性格を帯びるにいたつた」^②、それは「もはや封建初期に頻繁に行われたような私的戦争 *guerre privée* ではなく、まことに人民と人民との戦争であつた」^③と考えるのがほぼ現在の通説であろう。しかもこのような見解が、イギリス軍のフランス侵略に対してフランス民衆が果敢な抵抗を挑んだという事実——そういう意味での民衆の戦争への参加——、すなわち多くの

歴史家が「民族的抵抗」(résistance nationale)と呼んでいるあの事実を主要な論拠の一つとしていることはあらためて断るまでもない。「それ以上に民族意識の根強さを証明するものは存しない」^④とまでいわれているからである。

このいわゆる「民族的抵抗」は百年戦争の全時期を通じてイギリス軍の侵略と荒掠のあるところに常に発生したにちがいない。しかしフランスにおける民族ないし民族意識の形成という視角からこの民衆の抵抗運動を考察しようとする場合、その対象はとくにフランス王国が危急存亡の淵に立たされた時代、民族的英雄と讃えられるかのジャンヌ・ダルクが活躍した時代、すなわち十五世紀のほぼ第二四半期に当る時代に求められねばならない。アザンクルの敗戦（一四一五年一〇月）を序曲として開始されたフランスの悲劇は、トロア条約の締結（一四二〇年五月）において頂点に達し、その決定に従つてシャルル六世の死（一四二二年一〇月）はフランスの王冠をイギリス国王ヘンリー六世に与えた。フランス王国は分断された。ヘンリー六世は「フランスならびにイギリスの王」、いわゆる「複合王国」(double monarchie)の君主として、古来の所領ギエンヌ

地方を保持するのみならず、叔父ベドフォード公の摂政に補佐されてノルマンディ公国といわゆる「征服地方」(Pays de conquête)（トロア条約までに、ノルマンディの辺境を越えて——多くはバリ寄り——征服された地帯）とに君臨し、さらに

同盟者ブルゴーニュ公との共同統治の名目の下に首都パリおよびイル＝ド＝フランスの西部を事実上その膝下に制圧し、こうしてブルターニュを除く北フランスの大部分がイギリス＝ブルゴーニュ同盟の手中に帰した。トロア条約によつて王位継承権を否認されたシャルル七世は、アルマニャック党貴族に支持されてようやくロアル河以南の地にわずかの權威を保ち、「ブルジュニの王」たる悲運をかこつはかなかつた。

このような王国の混乱と危機は「民族的抵抗」を誘発した。陰謀、暴動、ゲリラなど種々の形の抵抗運動が、イギリスの支配する全地域にわたつて展開した。早くからブルゴーニュ党にくみしてトロア条約を受諾したバリが、かえつてこの運動の中心となつた。ヘンリー六世即位の直後、富裕な市民ミシェル・ド・ライエ Michel de Lailier を首謀とする陰謀が発覚した。血なまぐさい弾圧にもかかわらず

ず、謀反の動きは以後絶え間なく続いた。^⑤オルレアンを包囲（一四二八年一〇月―二九年五月）とジャンヌ・ダルクの出

現は反抗を鼓舞した。ベドフォードが派遣したイギリス増援軍は、一斉に蜂起したガチネー Gâtinais の農民によつて阻止され、オルレアンの解放成るや、各地の荒廢した畑

の中で、また破壊された村々の跡で、歡喜の炎が燃えたという。^⑦パリでは一四三〇年とくに大規模な陰謀が、アルマニャック党と結託した修道士ピエール・ダレ Pierre d'Allee らによつて企てられ、パン屋、仕立屋などの庶民も多数これに参加したが、未然に發覺して一五〇人が捕えられ、六人の首がはねられた。^⑧しかしイギリスの支配に対するパリ市民の不滿と反感はますます激昂した。一四三三年の陰謀に参加した一職人の言葉を借りるならば、「こんな事態がこれ以上長く続くことはあるまい。もしパリで五〇〇人がまとまつて反乱を起すなら、千万の味方が見つかるだろう」といつた空氣が首都を満たした。一四三五年九月、シャルル七世とブルゴーニュ公との間にアラスの和約が成立し、翌年四月市民の暴動に助けられてリシュモン伯がパリに入城したとき、パリの民衆は彼を熱狂的に歡迎し、逆にルー

アンに向けて逃走するイギリス人に嘲罵の声を浴びせたといわれる。^⑩

しかし抵抗運動がもつとも激烈かつ執拗をきわめたのはノルマンディ地方であつた。すでにイギリス当局はその占領諸地域中とくにこのノルマンディに特別の地位を与えていた。それは単にこの地がかつてのイギリス王室領であつたというだけではない。それは今やフランス征覇の政治的軍事的拠点であり、「複合王国」を結ぶ扇の要であつたからにはかならない。ヘンリー五世が王弟ベドフォードに後事を託しながら、「パリを棄てる破目に陥るともノルマンディは確保せよ」と遺言したのもこのゆえである。イギリスの支配がここノルマンディにおいてとくに細心と嚴格をきわめ、従つてまた有形無形の住民の抵抗が一四五〇年のその解放にいたるまで執拗に続けられたのも当然であつた。われわれは次にノルマンディにおける「民族的抵抗」をやや詳細に扱いながら、さらにこのような民衆の抵抗運動が「民族的」と形容されるのが妥当であるか否か、妥当であるとしてもそれはどういう意味においてであるか、要するに民衆の抵抗がフランス民族の形成にとつていかなる意義

を担うものであるかを明らかにし、この絶対主義前夜における民族ないし民族意識の性格にも触れてみたいと考える。ただし参照しえた史料と文献がきわめて限られており、従つて疎漏この上ない試論にすぎないことをあらかじめ断つておきたい。^⑩

① 民族 Volk と国民 Nation を嚴格に区別するドイツ流の見解がわが国でも普及しているが、ここではさういう区別に拘泥することはしない。それは、さうまでもなくフランス語ではこの区別がなく、ともに *nation* という語で表現されるという理由からだけではない。フランスの具体的な歴史の上で、「民族」と「国民」とはともに言語、地域、経済生活、文化の共通性を基盤とするものとして全く同義語であると考えからにはかななる。

② M. Deffenneux, *La vie quotidienne au temps de Jeanne d'Arc*, 1952, p. 295.

③ E. Chénon, *Histoire générale du droit français public et privé des origines à 1815*, 1926, p. 818. M.-M. Martin, *La formation morale de la France*, 1949, p. 163. 上の金へ同じ見解が見える。

④ J. Calmette et E. Dejez, *La France et l'Angleterre en conflit* (G. Clotz, *Histoire générale*), 1937, p. 379.

⑤ Ch. Petit-Dutaillis, Charles VII, Louis XI et les premières années de Charles VIII (Larisse, *Histoire de France*), 1902, p. 41.

⑥ Jacques d'Avout, *La querelle des Armagnacs et des Bourguignons*, 1943, p. 370.

⑦ Martin, op. cit., p. 168.

⑧ Deffenneux, op. cit., pp. 286-287.

⑨ Ibid., p. 286. この一四三三年の陰謀は奇妙な発端から生じた。金銀細工屋、靴屋、パン屋など四人の職人がある居酒屋で食事をしたとして、戦争の話や、貧乏人のみじめさの話に花を咲かせようとしたに、お互いの仕事の不景気に話がすすみ、ついに陰謀にまで発展した。

⑩ Calmette et Dejez, op. cit., p. 439. Petit-Dutaillis, op. cit., p. 84.

⑪ 幸う参照しえた史料は、*Chronique du Mont-Saint-Michel*, éd. par S. Luce, Tome I, 1879 (二巻のうち第一巻だけ) 所収の「モンサンミッシェルとイギリス占領期ハス・ノルマンディにおける民族的防衛とに関する諸文書」と、同時代人の著述として Thomas Basin, *Histoire de Charles VII*, éd. par Ch. Samaran, Tome I (1933), Tome II (1944) のちを参照。またハス・ノルマンディ住民の抵抗運動についての古典的研究書とされる Lefèvre-Rontals, *Episodes de l'invasion anglaise; la guerre de partisans dans la Haute-Normandie*, 1893-5 などを手引とするべきであった。

二、ノルマンディの抵抗運動

イギリス軍の占領とイギリス当局の支配という事態に対

して、果してノルマンディの住民はどのように応じたのであろうか。その所屬する社会階層のいかんによつて多かれ少なかれニュアンスの差があつたことはいうまでもない。ノルマンディ貴族の大部分は各自の城砦に拠つて侵略者に抵抗してのち、イギリス國王に対する服従を拒否してある者は南フランスに亡命し、ある者は公国の辺境に逃れて反抗を続け、またある者は——あとで述べるように——いわゆる「悪党」《brigands》の群に身を投じた^①。それに反して聖職者と都市の商人とはほとんど完全に侵略者に服従し、その施政に協力したと、ペロアは述べている^②。しかし完全に屈服した聖職者は司教や修道院長など高級聖職者だけではなかつたか。モン・サン・ミシエルの僧兵たちは修道院長の裏切りにもかかわらず不撓不屈の戦いをつづけ、また戦乱に破壊された各地の修道院から「悪党」の群に投じた修道士も少なくはなかつた。そしてまた一四二九年の倍額十分の一税 *double décime* の徴収はとくにバス・ノルマンディにおいて聖職者の猛反対にあい、彼らに対する破門の脅迫もほとんど効果を示すことがなかつたといわれる^③。

同様にイギリスに協力した商人もごく限られた一部の上

層市民だけであつた。イギリス当局の商業政策ないし都市政策——度量衡制度の確立、商人への通行許可証の發行、貨幣制度の改善、都市特權の確認等々——に恵まれて、ノルマンディの商業活動はヘンリー五世の治世末からベドフォードの時代にかけて十余年の間この世紀中最高の実績を示し、一部の商人層をして急速にイギリスに加担せしめるにいたつた^④。塩倉庫監督官に任ぜられ、イギリス貿易の諸特權を賦与されたディエップの商人ボードアン・ワード *Baudoin Wyde* のごときは、その代表的人物であつた^⑤。しかし彼らは少数にすぎない。少なくとも市民大衆はイギリスの支配に背を向けてブルジュのシャルル七世に期待を寄せた^⑥。ヴェルヌーイユの戦（一四二四年八月）の前後は、ノルマンディにおける反抗運動の昂揚期であつた。ルーアンでは富裕な材木商人リシャル・ミット *Richard Mittes* を中心に陰謀が企てられ、アルマニャック軍を市内に導き入れる計画が立てられた^⑦。ジャンヌ・ダルクの処刑（一四三一年五月）は新たな怒りをノルマンディにもたらした。翌年二月またもルーアンに陰謀が発生し、イギリス当局は未然にこれを発見しようやく事なきを得ることができた^⑧。

イギリスの支配に対する住民の不満と反感は必らずしも積極的・意識的な当局への反抗という形をとるとは限らなかった。抑圧された反感が個々のイギリス人に向けられ、また逆にイギリス人の不遜な行動が住民の反感を刺戟した。駐留イギリス人とノルマンディ住民の間の漠然とした敵意が、占領期間を通じて一つの暗い、しかし根深い底流を形づくっていたようである。このような常には覆われてあらわな姿を見せぬ敵意と反感が、時に研ぎすまされて鋭い摩擦をおこし、血なまぐさい氷山の一角を現わすことがあった。ともにバス・ノルマンディに発生した次のような事件がそれである。一四二六年三月ローラン・オデオン Laurent Odion と称する土着の一地方官は、彼の馬を強奪した上、悪口雑言の限りを浴びせ、さらに剣を抜いて威嚇するイギリス貴族とわたりあい、ついにこのイギリス人の下僕を斬り倒した^⑩。また一四三一年地方官や農民を含む数名の住民が、民家に宿泊していたイギリス兵を襲撃し、その一人を付近の河畔に連れ出して溺死させた^⑪。

しかしノルマンディ住民運動の中でもっともわれわれの興味をひくのは、当時のイギリス側の文書に数多く記録さ

れたいわゆる「悪党」の活動であろう。前世紀末のルフェーヴル・ポントリスの研究以来、多くのフランス史家はこの「悪党」こそ祖国に殉じた義勇兵であると考え、すなわち「悪党」の群はそれぞれ首領のもとに統率され、イギリス人および祖国を裏切ったフランス人を襲撃することを誓い合い、奥深い森の中などに本拠をかまえ、そこに食糧その他の物資を貯蔵する。武器は不統一ながら、多くの場合奇襲戦法をとつてとくに敵の役人を襲い、かつフランス側の前哨基地とも密接な連絡を保つ。彼らに対する追求と弾圧はきわめて厳しく、一人につき六リーヴルの賞金をつけて密告や逮捕を奨励し、捕えればただちに死刑に処する。

「悪党」の呼称は、彼らを一切の裁判ぬきに処刑するための便法にすぎない。しかし彼らは住民の大多数から支持され、農婦は食糧を提供し、村の司祭は連絡係をつとめ、床屋は負傷者の看護に当る。こういう「悪党」への援助がやはり残酷な刑罰を覚悟すべきものであつても、それでも住民の協力は絶えない。まさに「悪党」は愛国者であり、シャルル七世のパーティザンである^⑫。しかしこのような断定は果して正鵠を射るものであろうか。この混乱の時代

に生きてつづきに辛酸を体験したトマ・バザン Thomas Basin の叙述は、必らずしもこういう断定を保障していないように思われる。「フランス側に立つて戦うことをのぞき、かつ多くの場合正規の編成をなさず、給与も受けず、しかもフランス方に服せる砦や城に拠つた連中のほかに、あるいは勇氣に欠けるためか、あるいはイギリス人への憎しみのためか、あるいは他人の財産であての掠奪欲からか、またあるいは犯した罪におびえて法網を逃れるべく、田畑と家屋を棄てたがために、フランス方の砦や城に拠らず、フランス方の隊伍に入つて戦うこともせず、樹木が密生して近よりがたい森の中で野獣か狼さながらの暮らしを送る、絶望して救いのない輩がはなはだ数多くあつた。……：一般に悪党と呼ばれたこのような輩がノルマンディで暴れたのだ」^⑧（傍点筆者）とバザンはいふ。「悪党」とは、フランスのため、シャルル七世のため積極的・意識的に反旗をひるがえしたというより、むしろ掠奪をこととした浮浪者や犯罪者を指すのではないだろうか。かつてイギリスのロウ女史がこういう点を指摘して、フランス史家の通説に論駁を加えた。彼女によれば、イギリス軍の侵入以前すて

にノルマンディの森は暴徒の群の巢窟であり、しかも「悪党」という呼称は、「バリー市民の日記」『Journal d'un bourgeois de Paris』などにおいて、十五世紀はじめブルゴーニュ党またはアルマニャック党の兵士たちに悩まされて森の中にかくれた農民の武装集団に適用されており、従つて「悪党」はイギリス占領の産物であるとはいえない。バザンの記述からみても、外国人に対する憎悪は占領期「悪党」の動機の一つにすぎず、その主要な動機はむしろ掠奪欲にある。いわゆる「悪党」の中にフランスのパルティザンが含まれているとしても、それは一部にすぎないといふのである。通説に対する同様の疑問が、「悪党」と一般住民との関係についても考えられる。住民は進んで「悪党」に協力したのであろうか。バザンによれば、「悪党」は「農家に押し入つて財産を奪ひ、農民を捕えて森のかくれ場に連行し……日時と場所を指定して多額の身代金を強要した。この約束が守られぬ場合には、人質として残された者が極悪非道この上なき虐待を受けるか、当の農民自身が再び捕えられて殺されるか、あるいはまたその家が夜中に放火されて焼失するかであつた」^⑨。また彼らは「隣人

たちを捕え、なにかんずくもつとも親しい人たちを捕えて掠奪した^⑧。「悪党」はいたるところに恐怖をまき散らした。

彼らに対して一般住民が自発的な協力を憎しまなかつたというのは疑わしい。なるほど両者の協力關係を証明する史料は少くない^⑨。しかしそこでは住民が、脅迫され強制されて「悪党」に援助を与えたことを弁明している。それは一片の弁解にすぎないのかも知れない。けれどもまた逆にそれが事実であつたのかも知れない。決定的な判断は控えるほかはないが、少くとも通説をうのみにすることは危険であらう。

ということとはしかし、通説を全面的に否定して、いわゆる「悪党」がすべてイギリス占領当局に対する抵抗という政治性を全く欠いた盜賊の群であつたと結論づけるのではない。バザンが数カ所にわたつて指摘しているように、彼らは「なにかんずくイギリス人の生命を狙い、機会さえあれば情容赦なくイギリス人を殺した^⑩」。すなわちイギリス人への憎悪、イギリス支配への反感が、ともかく彼らの動機の一つであつたことは否定すべくもない。彼らは「悪党」の名のもとに身代金による釈放の權利を否認され、逮捕は

同時に死刑を意味した。ただし、その処刑の方式に絞首と斬首の二種類があり、一般に前者は通常の犯罪者に適用され、後者は政治犯に適用されるとのロウ女史の解釈に誤りがないとすれば、記録に残る「悪党」の処刑件数中絞首と斬首の比率が二対三であるという事実からして、処刑された「悪党」の半数以上がイギリス当局に多かれ少なかれ何らかの政治的考慮を払わせるような性格を具えていたものと考えることができる^⑪。要するに「悪党」がすべて純然たるバルティザンであつたとする説も、逆にそれがすべて乱世にわき出た盜賊にすぎないとする説も、ともに正確ではない。はなはだ平凡で曖昧な評価になるけれども、いわゆる「悪党」の中には、イギリスの支配に鋭く対立した抵抗者と専ら掠奪暴行にふけつた盜賊とが無差別に含まれていたと結論するか、あるいはむしろ——正規の戦士すら盜賊と区別したいほど掠奪行為をこととしたという当時の事情を考慮しながら、より蓋然性の強い事態を想像するならば——一般に「悪党」は抵抗者たる性格と盜賊たる性格との二重の側面を併せもつており、ほぼ純粹な抵抗者からほとんど完全な盜賊にいたるまで、その間両性格の混合の

割合により同じ「悪党」の中にも種々のニュアンスの相違があつたのではないかと推定するよりほかはない。

しかしその性格が何であれ——たとい純然たる盗賊である場合でも——、「悪党」の跳梁がイギリスの行政的・軍事的機能をいちじるしく麻痺させ、イギリスの支配に深刻な動揺を与えたことはいうまでもない。「悪党」は、バス・ノルマンディといわずコー・Caux 地方といわずノルマンディの各地に出没し、いたるところで交通網が遮断されて、政府諸機関の連絡も商人の交通も特別の警護隊を必要とする始末であつた。^②イギリス当局は彼らに手をやいた。厳しい対策が講じられた。彼ら一人一人の首に賞金をかけて追求を奨励し、イギリス兵らはこの賞金めあてに獵犬を連れて森の中を隅々まで探索した。^③また若干の地方では、「悪党」に備えて農民から成る民兵制度が採用されさへした。ことに少なくとも一四二三年十二月（カン）と二六年九月（マント）の二回にわたり、この「悪党」の問題がノルマンディ三部会に提起され、その対策が真剣に講じられたという事実は、「悪党」が惹起した事の重大さを証して余りあろう。^④トマ・バザンが伝える次の有名なエピソードはき

わめて象徴的である。数名のイギリス人が食事をともにしながら「悪党」撲滅の方法について意見をたたかわせていた。丁度その場に居合わせたノルマンディのある聖職者にも意見が求められた。彼はしきりにためらいながらも、しかし明確な答を述べた。「残された方法は一つしかないと思う。それは全イギリス人がフランスを去つて故国イギリスに帰ることだ。しからばたちどころに悪党が消滅することとは疑いない」と。^⑤バザンによれば、「悪党」とその同調者が一年間に一万人以上も処刑された。^⑥しかし、——バザンは筆を進めている——「幾多の対策が立てられたにしろ、イギリスの支配が消滅して国土がその本来の主人たるフランス人の手に戻るまでは、この害悪を一掃することはできなかつた」。

さきに触れたように、「悪党」とは釈放の権利を否認する称呼であり、その点で通常の戦士 (*homme d'armes*) から区別される。この両者の区別の基準が、とくに斬首刑に服した——すなわち政治犯として扱われた——「悪党」に関する文書につねに「裏切者」*traine* という表現が見られることから、かつてイギリス国王に忠誠を誓つたことが

あるか否かという点にあり、従つて「悪党」とは一旦イギリスに服しながら後に忠誠の誓を破つた者の呼称であるとの推定が正しいとすれば、ノルマンディの「悪党」はイギリスに服属するノルマンディ自体の出身であり、その活動は土着民自身の活動であつたと考えてはば誤りがなからう。

しかもこの「悪党」の群にはノルマンディのあらゆる社会層——下級貴族、修道士、手工業者、農民、獵師、浮浪者等々——が参加した。ことに「悪党」の個々の集団を率いたのは、領地を棄てた貴族または修道院を去つた修道士、な

というバルティザンの性格を帯びたのは、おそらく彼ら貴族層の指導によるものであらう。しかし数量的に「悪党」の主力を構成したのはむしろ一般の民衆、とりわけ農民ではなかつたらうか。軍隊の横暴に追われて森の中にかくれ、掠奪を習いとしながら正規軍にゲリラ戦を敢行し、捕わればただちに絞首刑に処せらる武装した農民の集団を指して「悪党」と呼ぶような、「バリー市民の日記」などの用語法は、イギリス占領下のノルマンディでも妥当したのではなからうか。なぜなら、農民こそ戦乱の、そしてまたイギリス軍事占領の最大の犠牲者であつたからである。

Andener 地域出身のギョーム・アン・Guillaume Hallé は、はじめノジャン＝ル＝ロトルー Nogent-le-Rotrou のアルマニャック守備隊に参加したが、間もなく故郷に帰り「悪党」に身を投じてその首領となつており、またロベール・ド・カルージ Robert de Carrouges というバス・ノルマンディの貴族は一四二四年その資産を整理し、「悪党」を組織してその首領をつとめた。アレの率いた集団が彼の参加によつてはじめてイギリス支配への反抗という旗印を掲げた事実からも明らかなように、「悪党」がイギリスへの抵抗

「悪党」に加つたのが数的にノルマンディ農民層のごく小部分にすぎなかつたことはいうまでもない。しかし一部の農民を「悪党」の群に投じたのとおそらく同一の条件が、農民の大衆蜂起を促した。すでに一四二四年ヴェルヌーイユの戦の直後、各地の農民が蜂起した。この戦闘のはじめイギリス軍の旗色悪く、脱走兵が続出し、そのためイギリス軍潰滅せりとの早まつた報道が全ノルマルディに流されたからである。蜂起した農民は、逃亡して来たイギリス兵を捕えて惨殺した。より大規模の農民蜂起がアラスの和約

の前後に続発した。一四三四年のはじめベドフォードがイギリス軍勢力の不備を補うべくノルマンディの全住民に自衛の武器を与えたことが、予期せざる結果をもたらしたのである。イギリス兵の残虐行為と重税とが直接の動機であった。まづバス・ノルマンディが立ち上った。一万二千を数える農民が一部の貴族に率いられてカン攻撃を企てた。

しかし孤立無援の反乱は、イギリス軍の迎撃に遭つて失敗に終つた。翌年アラス条約締結直後、類似の反乱がコー地方にも勃発した。ル・カリニエ Le Curvier と称する農民や貴族に指導されて二万の農民が蜂起し、アルマニャック^②フランス軍と連携しながら、六週間にしてコーのほとんど全土を制圧した。しかしアルマニャック軍との同盟はまもなく破れた。農民のエネルギーに脅怖を感じた土着貴族とアルマニャック軍に見殺しにされて、農民軍は立直つたイギリス軍の前について潰滅し、英仏両軍の掠奪にあつてコー地方の荒廢は極限に達した。それにもかかわらず翌三六年はじめ、再びバス・ノルマンディのヴィル溪谷地方 Val-de-Vire に反乱が起つた。残酷な弾圧以外にこの騒動を消しとめる方法はなかつた。^③

まさにイギリスの支配は深刻な動揺を示した。モン・サン・ミシエルの抵抗は依然として頑強をきわめ、「悪党」の反抗はますます執拗となり、住民の不満が増大した。一四四九年七月シャルル七世がノルマンディの奪回に着手するや、住民はその軍隊を解放軍として歓迎した。ノルマンディ住民は——バザンの言葉によれば——「恐怖と暴力の耐えがたい軛を断ち切る方途に気づくや否や、喜々として本来の彼らの王国、すなわちフランス王国を迎え入れようと努めたにとどまらず、進んでそれを招き求めるべく努力した」^④。ノルマンディ解放の戦いがわずか一年で完了したのは、フランス軍の用いた火器の威力もさることながら、このような住民の歓迎と協力の賜であつたといえる。

① L. Perroy, *La guerre de Cent ans*, 1945, p. 219. *Petit-Dutaillis*, op. cit., p. 42.

② Perroy, op. cit., p. 219.

③ *Mont-Saint-Michel*, p. 278 n. 1.

④ M. Mollat, *Le commerce maritime normand à la fin du moyen âge*, 1952, p. 25 ff.

⑤ 一四三五年一〇月ディエップが解放されるや、彼は投獄され、巨額の身代金を課されたが、ヘンリー六世は彼の忠誠に報いるため、イギリスから四〇捆の羊毛を輸出する特権を与えてその

- 釈放を援助した (Mollat, op. cit., pp. 45-46)°
- ⑥ 一四二三年の「ノルマンディーの忠良なる諸都市」《*bonnes villes*》はシャルル七世に密使を送って歓迎と服従の意を表明した (Defouneaux, op. cit., p. 287)°
- ⑦ Petit-Dutailis, op. cit., p. 43.
- ⑧ Calmette et Déprez, op. cit., p. 429.
- ⑨ Mont-Saint-Michel, p. 237 ff.
- ⑩ Ibid., p. 302 ff.
- ⑪ 以下は「正義を維持して悪党を根絶する」《*entretenir justice et extirper les brigands*》(ibid., p. 131) なる「悪党をもちよる他の敵を追いつ根絶する」《*expeller et extirper les brigands et autres ennemis et adversaires*》(ibid., p. 265) なる「悪党を逮捕して撲滅する」《*prendre et destruire les brigands*》(ibid., p. 267) なる維持やなるを部隊への給与の支給を命ずる文書であるといふためのタメの議決を証する文書が多数残っている°
- ⑫ Petit-Dutailis, op. cit., p. 42f.; Calmette et Déprez, op. cit., p. 380 f.; Perroy, op. cit., p. 219f.; J. Calmette, *Jeanne d'Arc*, 1950, p. 35 (邦語四四頁); Defouneaux, op. cit., p. 288 ff.
- ⑬ Basin, op. cit., Tome I, p. 106 ff.
- ⑭ B. J. H. Rowe, John Duke of Bedford and the Norman 'Brigands' (E. H. R., 47, 1932)
- ⑮ Basin, op. cit., Tome I, p. 110.
- ⑯ Ibid., p. 112.
- ⑰ Rowe, op. cit., p. 588.
- ⑱ たとえば「悪党と通謀したためにアヴァンシユの監獄に拘留せられた農夫コラン・ギルベール Colin Gilibert に対し」一四三三年二月イギリス当局が賦与した赦免状 (Mont-Saint-Michel, p. 304 f.)°
- ⑲ Basin, op. cit., Tome I, pp. 108, 112.
- ⑳ Rowe, op. cit., p. 591 f.
- ㉑ 以下は事情については拙稿「百年戦争期フランスにおける傭兵の問題」(京大西洋史研究室編「傭兵制度の歴史的研究」昭36、所収) 参照°
- ㉒ 一四二六年以後、ルーアンからランディ Lendit へ赴く商人を護衛するため、ロー地方とノルマン河 Oise の間に四ランズと二六弓兵の小部隊が配置された。またルーアン大司教とシャロン司教の秘書たちは、十分な護衛をつけてパリに向つたにもかかわらず、途中で掠奪を受け、摂政エドフォールとさえ「パリとルーアン間ではさう危険に満ちたことがあつた」(Mollat, op. cit., p. 50f.; Defouneaux, op. cit., p. 289)°
- ㉓ Basin, op. cit., Tome I, p. 112.
- ㉔ Defouneaux, op. cit., p. 289.
- ㉕ B. J. H. Rowe, The Estates of Normandy under the Duke of Bedford, 1422-35 (E. H. R., 46, 1931), p. 373.
- ㉖ Basin, op. cit., Tome I, p. 108 ff.
- ㉗ Ibid., p. 112. ロウ女史によれば「この数字は明らかに誇張

であり、イギリス占領の全期間にわたつても一万人もが処刑されたかどうかは疑わしう (Rowe, *Norman Brigands*, p. 599 f.)。

³² Basin, op. cit., p. 114.

³³ Rowe, *Norman Brigands*, p. 592 ff. ヴォーケーヌ³⁴「逮捕されたノルマンディなしいイギリスの裏切者は普通の捕虜としての待遇をうけなかつた」云々 (R. A. Newhall, *The English Conquest of Normandy 1416-1424*, 1924, p. 229)。

³⁴ Calmette et Deprez, op. cit., p. 380.

³⁵ Perroy, op. cit., p. 220 ; Defouneaux, op. cit., p. 288.

³⁶ Rowe, *Norman Brigands*, p. 589.

³⁷ Petit-Dutaillis, op. cit., pp. 42-43.

³⁸ Rowe, *Norman Brigands*, p. 590. ただしロウは、このやうな旗印も単に掠奪生活に正規の戦争なる仮面を着せようとする試

みにすぎなかつたのではないかと疑っている。

³⁹ *Ibid.*, p. 585 f.

⁴⁰ Mont-Saint-Michel, p. 142 ff. ; Petit-Dutaillis, op. cit., p. 44.

⁴¹ Petit-Dutaillis, op. cit., pp. 74, 80-81. ヴェザンは以上の農民蜂起についてとくに詳細な叙述を与えており、その部分はまさに全篇中の白眉である (Basin, op. cit., Tome I, pp. 196-226)。

⁴² Basin, op. cit., Tome II, p. 106.

⁴³ このノルマン市民の蜂起はその解放(四九年一〇月)に大いに貢献した。バザンの叙述はこのノルマン解放の事情についても詳細であつて、それが兵器の威力だけでなく住民の意志と行爲によるものであることを指摘してゐる (Basin, op. cit., Tome II, pp. 118-130)。

The Expedition to North by Abe-no-Hirafu (阿倍比羅夫)

by

Nobuo Muroga

In terms of Japanese history, 肅慎 reads Mishihase. This reading depends on one hand, on the knowledge of northerners originated in China, and, on the other, coincides with the geographical view of Japanese themselves that the Japanese Islands and the China Continent come very close in upper north. The latter view may result from the communications between Korai (高麗) and this country since around the end of the sixth century. The author argues that the northward expedition of Abe-no-Hirafu intends not only to intervene in a conflict between Mishihase and Ezo (蝦夷), but also to explore geographical relations in this area, and, further, to discover an international trade route due to of the request of the government.

Although the problem of the geographical relation between the northern part of Japan and that of the Continent had remained unsolved, Hirafu seems to have interpreted this problem by identifying the people living in both areas.

Hundred Years' War and the Making of French Nation ; on the regime and the resistance in Normandy

by

Hiroshi Kawaguchi

It is taken for granted that the period of Hundred Years' War coincides with that of the making of French nation, and that the popular resistance under the English occupation is "national resistance." The author here, analyzing the resistant movements among the common people and the policy of English occupations in Normandy, intends to discuss whether these movements are really "national ones" and, further, to discuss in what relations these movements are with the growing French nationalism, including the problem of the stages of the development of the nationalism and its connection with the royal family.